

し人也又加賀守盛幸といふ人、明應中箱館に居り、後武田太郎信廣に敗破られて麾下に屬す、永正八年、加賀守の息彌次郎右衛門といふ人、蝦夷の亂に没し、永祿元龜の間、加賀守好通といふ人、蠣崎義廣の舅となる、文祿の頃、蠣崎慶廣箱館を破墮る、城跡は淨玄寺の東より公廳の前にか、り、會所町に亘り、塹溝の蹟現に存せり、慶長年間、龜田の人民多く、茲に遷れり、商船は昔近江越前より偶來れるのみ、上方船は百四五十年前、大坂道頓堀の橋屋某の船の來るを始とす、然れども猶落船の由を松前へ申すことなりき、後六七年過ての書に、龜田より箱館といふ湊廻船入込、繁昌の處也とみゆ、其逐年般賑に到る事思知るべし、蠻船の初て港中に入しは、寛政五年、根室へ來し魯西亞人の、茲に入津せしは六月八日也、是より松前へ陸行せしめ、御目付石川將監、村土大學等應接したり、今は北國無雙の都會となり、天下の船艦輻輳するのみならず、海外蠻船も貿易を求、商販を事とし、相競て入港するに到れり、

〔北海隨筆〕下 蝦夷松前開發

一今の松前城下は、領内の中央を以て府となし、○中略是より三十里東海路龜田と云ふ所は、土地平坦にして、一國の都會の地となし、西北は山つらなり、海へ聳て蝦夷地のかためあり、東南は入江にして、數千艘の舶舟今風波の恐れなし、海を隔て南方は南部領佐伊大間等の港まで八里の渡りにて、○中略岫かも潮流おだやかにして、タツヒシラカシの如くなる激流なし、風景優美にして、箱館の山海中に突起し、入江の屏障となれり、此地を以て府中を定る時は、往々仙臺水戸邊の船通路彌仕ならひ、江戸廻船も自由すべし、箱館よりは江戸廻船自由し、江指よりは上方廻船自由する時は、海路にをいて事たりぬべし、

〔東遊雜記〕十四 取勝といふ浦は、至てよき町にて、家數千六百餘軒、はし／＼に至る迄も貧家と見ゆる家は更になし、濱通りには土倉幾軒となく、建ならべ、諸州よりの廻船此日見る所、大小五十